

## 帝釈大風呂洞窟遺跡（第19・20次）の調査

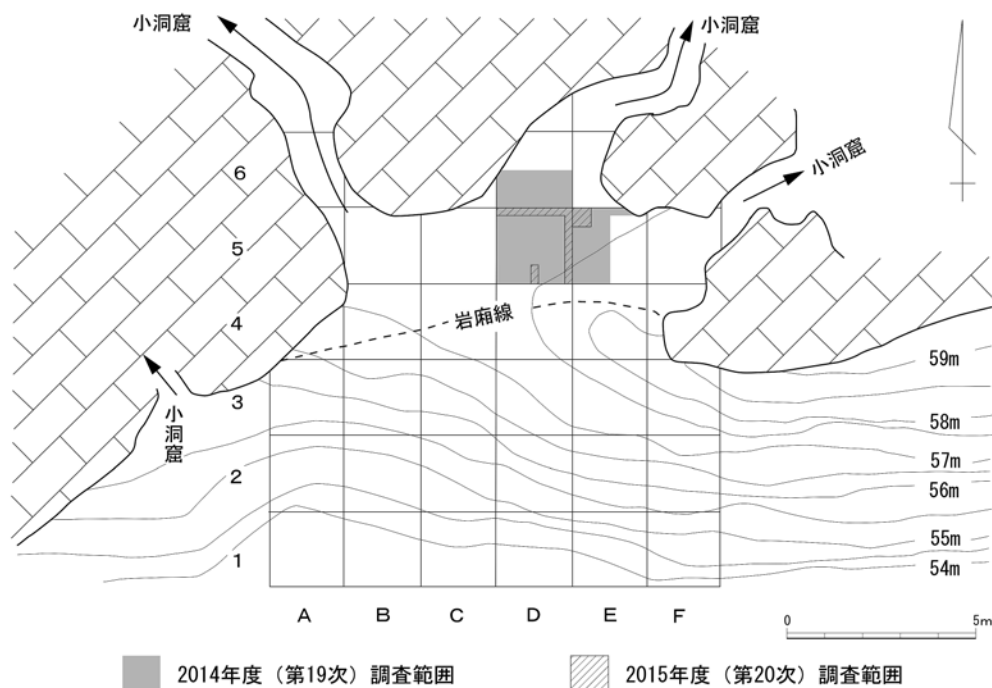
市川 伯博・平尾 英希

### 1. 遺跡の概要とこれまでの調査経過（図版第1、第1図）

帝釈大風呂洞窟遺跡は広島県神石郡神石高原町永野字大風呂に所在する。本遺跡は帝釈川支流の岩屋谷川左岸に位置し、帝釈観音堂洞窟遺跡のテラス地表面（発見当時）の直上比高差約40mの高所に立地する。急峻な斜面地にあるものの、洞窟は南に開口しており、日当りは良好で前面には平坦なテラスが広がっている。洞窟は小規模で、現地表面でみると間口幅約11m、奥行約4m、岩廂までの高さ3.0～3.5m、洞窟テラスの平坦面の広さは約40㎡である。洞窟内には小洞が3穴あって、さらに北側にのびている。

本遺跡は1984（昭和59）年に発見され、試掘調査により洞窟遺跡であることが確認された。1996年度から本調査を開始し、第1次調査から2002年度の第7次調査までは、遺跡西半のA・B・C区の調査を行った。この結果、遺跡の基本層序や利用時期が明らかとなり、今のところ第5層上部以上で土器・石器類などの人工遺物が認められ、縄文時代草創期もしくは早期から後期、古代・中世におよぶ遺物が出土している。また、焼土面などの遺構が層位的に検出されている。なお、第5・6層からは、更新世の絶滅動物骨が出土している。

第7次調査では、洞窟テラス東半のD・E-4区の調査に着手し、第8次調査からはD・E-4・5区、F-5区で平面的な調査を行っている。2007年度の第12次調査までに第2層



第1図 帝釈大風呂洞窟遺跡調査区配置図（1/200）  
（等高線の数値は岩屋谷川からの比高を示す。）

の調査を終了したが、第1・2層からは、中世から古代の遺構・遺物が検出され、また、2007年度にはD-4区の第2層下部から弥生中期土器1個体分が出土した。

2008年度の第13次調査からは縄文時代の文化層である第3層の発掘を開始した。同年度は第3a層上部を調査したが、D-5区で焼土面4面、D・E-5区で土坑1基を検出し、洞内側の5区列で遺構を確認することができた。しかし、その一方で、土器・石器類などの遺物がほとんど出土せず、洞窟テラス西半と比べて遺構と遺物の分布状況が対照的であることが明確となった。2009年度からは、以上のような偏在する遺物分布の問題や今まで未確認であった東半の層序の解明のためにD・E-4区で第3a層以下を先行して掘り下げ、洞窟テラス東半の堆積状況や下位の遺物・遺構の広がり調べることとした。そして、2011年度の調査までにD・E-4区では第5層まで発掘が進み、遺跡東半4区列の第5層までの堆積状況、遺構、遺物の広がりについて調査することができた。その結果、第3層、第4層についても東半4区列では土器、石器類の分布は希薄であることが確認された。こうした結果を受け、2012年度の調査では、遺跡東半でも焼土面などの遺構が遺存したことから、遺跡の中心ともみられる5区列で調査を行うこととした。また、2009年度から調査を中断していたD-5区第3a層の調査を再開した。その結果、焼土面とともに、マシジミや石器剥片類などの遺物集中部が検出され、炉周辺の一括性の高い遺物の分布状況が明らかとなった（竹広・松永2013）。そして一昨年度の調査では、D-5区に隣接するE・F-5区およびD-6区の遺構・遺物の分布状況を確認するため、これらの調査区の発掘を行った結果、E・F-5区第4層から計3面の焼土面を検出した（竹広・市川・藤井・森本2014）。

2014年度の第19次調査は、2012年度の調査で発掘を停止していたD-5区第3層以下の遺構・遺物の分布状況の確認を行うとともに、隣接するD-6区とE-5区の第3層以下の調査を継続し、遺跡東半全体の利用状況を考えることにした。また、本遺跡ではこれまでのところ埋葬は未確認であるため、遺跡東半でも洞奥寄りにあたるこれらの調査区で埋葬遺構の有無を確認することとした。そして、2015年度の第20次調査では遺跡東半における層序と遺構の有無の確認を目的とした最終的な発掘調査を行った。（平尾）

## 2. 2014・2015年度の調査（図版第1～4a・5b、第1図）

2014年度の第19次調査は8月5～12日・8月17～23日・8月25～31日の3期間、延べ22日間、2015年度の第20次調査は8月17～28日の延べ12日間にわたり発掘調査を実施した。帝釈大風呂洞窟遺跡の調査は本年度をもって一時中断となるため、調査終了後、調査区内のすべてのトレンチ内に遺跡保護のため拳大から人頭大の礫を敷き詰めた。本来ならば埋積土と異なる砂を用いて埋め戻すのが最善策であるが、遺跡の立地上、物理的に困難なため、調査区内から排出した石灰岩礫を用いることとした。

D-5区は、第17次調査で第3層から焼土面が検出されるとともにマシジミや石器剥片類などの遺物がまとまって出土した調査区である（竹広・松永2013）。また、調査区南半において礫が集中して検出されていたが、第3層の途中で調査を中断していた。第19次調査から

D-5区の発掘を再開し、第3層以下を全面的に掘り下げたものの、遺構は検出されず、第3層以下の層序についても確認できていなかった。よって本年度は、D-5区における層序の確認と調査区南半で検出されていた礫の性格を明らかにすることを目的として調査区の北壁沿いと東壁沿いに幅20cm、南壁沿い中央に南北50cm・東西20cmの計2つのサブトレンチを設定した。各サブトレンチにおいて第5層までの層序を確認することができたものの、遺構を確認することはできなかった。調査区南半の礫は第3層から第5層にかけて散在していることから人為的なものではなく、自然崩落によるものと考えられる。出土遺物には縄文土器片、石鏃や石器剥片類、動物骨や貝片、カーボンなどがある。

D-6区では、第18次調査において調査区南東に設定されたサブトレンチで第5層までの層序が確認されていた。第19次調査において調査区南半を掘り下げ、第3a層から焼土面が1面検出されたところで調査を終了した。石器剥片類のほか動物骨や貝片、カーボンが出土した。

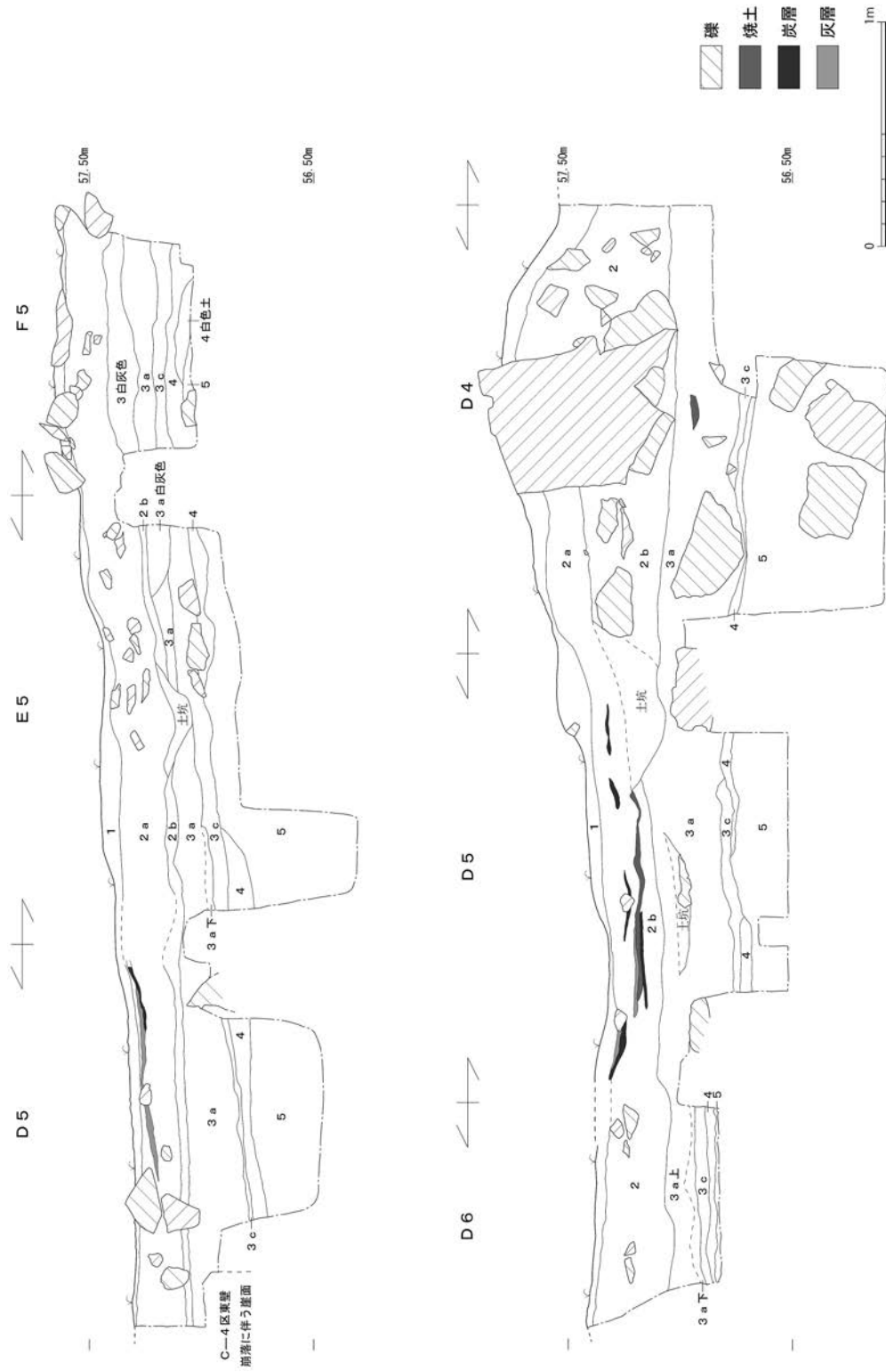
E-5区は、第18次調査で調査区南東に設定されたサブトレンチと、第19次調査において北壁沿いに設定したサブトレンチで第5層までの層序を確認した。第20次調査では、調査区北西に南北50cm、東西50cmのサブトレンチを設定し、第5層以下における遺構の有無と堆積状況を確認することにした。しかし、第5層を50～60cm前後掘り下げたものの、遺構を確認することはできなかった。石鏃片と考えられる剥片のほか、動物骨や貝片、カーボンが出土した。

また、第19・20次調査においても3mmメッシュの篩で発掘排土を水洗選別し、微小遺物の検出に努めた。(平尾)

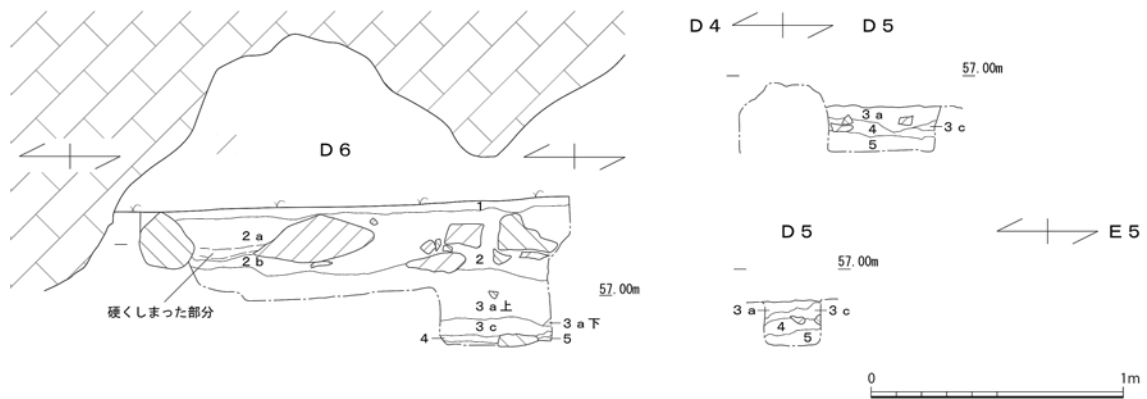
### 3. 層 序 (図版第2～3、第2・3図)

第19次調査ではD-5区、D-6区、E-5区の第3層以下の調査を、第20次調査ではD-5区の第3層以下、E-5区の第5層以下の調査を行った。今回の調査ではD-5区第3層以下の層序を確認することができ、洞窟東半における堆積状況を把握できた。ここでは、第19・20次調査で発掘を行った第3～5層について述べていく。なお、第19次調査では各層の色調について従来の肉眼観察とともに土色計（コニカミノルタ社製 SPAD-503）を用いて測定を行ったが、第20次調査では土色計による測定を行っていない。各土色名は既報告の名称を踏襲し、括弧内に土色計測定の土色名とマンセル値を示している。

**第3層** 第3a層と第3c層に細分することができる。第3a層は黄褐色（褐色、7.5YR 4/3）をしており、粘性がやや強いものの、しまりは弱い。D-5区では3mm前後の石灰岩の細礫を多く含んでいる。E-5区北壁では第3a層と第4層の間に粘性がやや強く、しまりの弱い褐色（暗褐色、7.5YR 3/4）の土層が確認されており、D-6区サブトレンチ東壁の層序と考え合わせると第3a層下部に相当すると考えられる。ただし、D-5区の北壁および東壁では第3a層下部を確認できていないため、第3a層下部は部分的な堆積と考えられる。洞窟東半において第3a層は東側から西側に向かって緩く下降しながら厚く堆積していた。



第2図 D・E・F-5区北壁(上)および、D-4・5・6区東壁(下) 土層断面図(1/30)



第3図 D-6区北壁、D-5区南壁沿サブトレンチ西壁・北壁 (1/30)

第3c層は暗橙褐色（暗褐色、7.5YR 3/4）のシルト質の土層で、粘性が強いものの、しまりは弱い。第3a層と同様に洞窟東半において東側から西側に向かって緩く下降しながら堆積していたが、D-5区では面的に広がっていないものと考えられる。

**第4層** 暗褐色（暗褐色、7.5YR 3/3）のシルト質の土層で、粘性は強いものの、しまりは弱い。第3c層と第5層と比較して黒味がかっている。第3a層と第3c層と同様、東側から西側に向かって緩く下降しながら堆積していたが、面的には広がっておらず、E-5区北壁中央付近では第5層の上に第3c層が堆積していた。D-5区東壁においても第4層が面的に広がっていないことを確認することができた。

**第5層** 橙褐色（暗赤褐色、5YR 3/4）のシルト質の土層で、粘性はかなり強いものの、しまりは弱い。第3a層や第3c層、第4層と同様に、第5層も西側から東側に向かって緩く下降している堆積状況を確認できた。E-5区の北西に設定したサブトレンチにおいて第5層が厚く堆積していることも確認できたが、洞窟西半で確認されている第6層を洞窟東半で確認することはできなかった。第16次調査において洞窟東半は第5層が厚く堆積する可能性が想定されており（竹広・小川原 2012）、本年度の洞窟東半奥側の調査においても第5層が厚く堆積していることを確認できたことから、洞窟東半では全体に第5層がかなり厚く堆積しているといえる。（平尾）

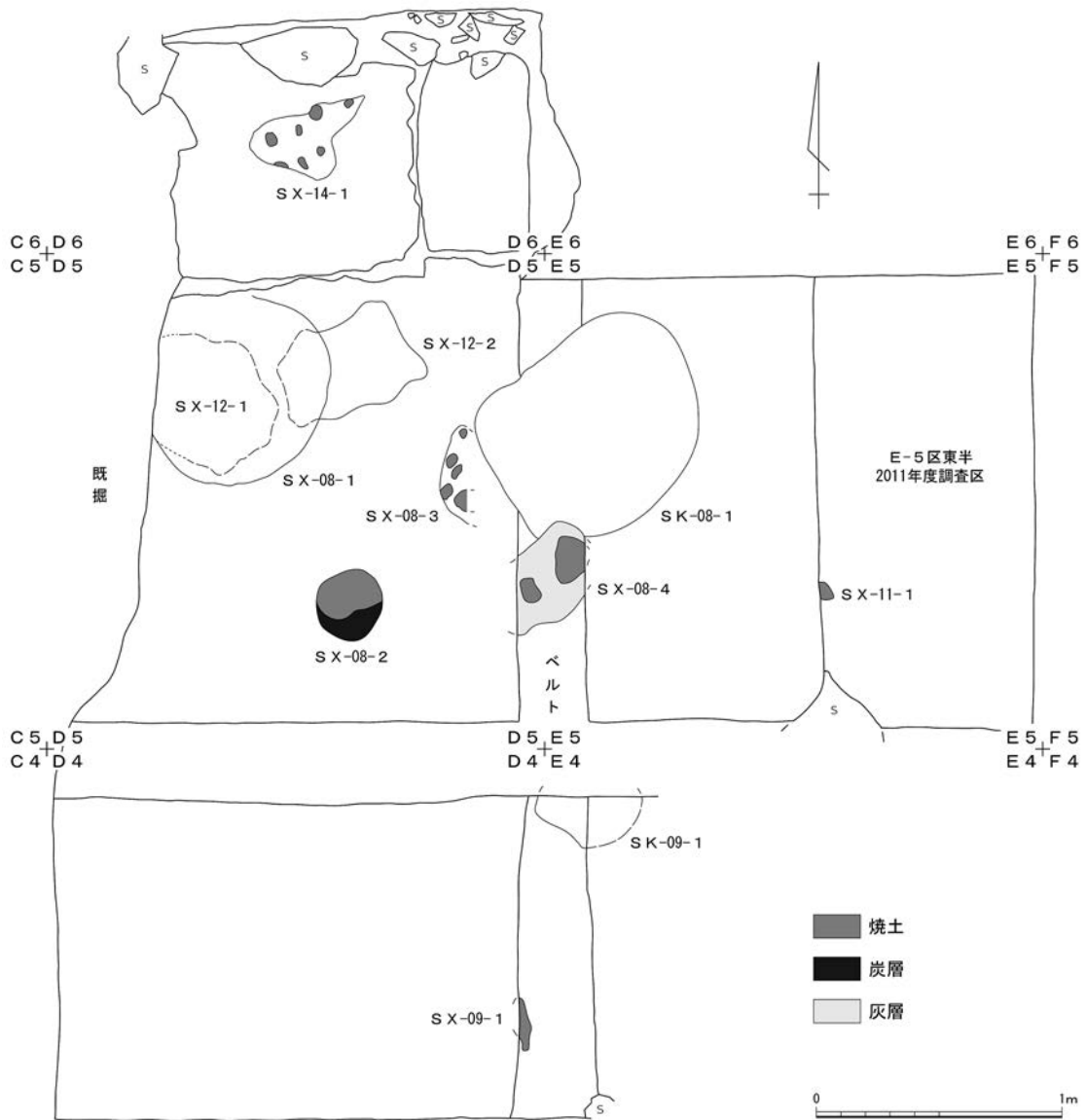
#### 4. 遺構（図版第4a、第4図）

第19次調査においてD-6区第3a層より焼土面が1面検出され、生活痕跡である焼土面が洞窟奥側に広がること明らかとなった。しかし、焼土面周辺で遺物は出土していない。なお、本年度の調査では遺構は検出されていない。

##### （1）SX-14-1（第4図）

D-6区南半で検出された焼土面である。南北約35cm、東西約50cmの範囲に暗赤褐色の焼土が斑状に検出された。遺構検出面で調査を終了しているため、焼土の厚さなどの情報は得られていない。（平尾）





第4図 帝釈大風呂洞窟遺跡東半部第3層検出の遺構配置図 (1/30)

### 5. 遺物 (図版第4b・5a、第5・6図)

第19次調査では、縄文土器片6点、石鏃2点、石器剥片類3点、212点以上の動物骨（焼骨を含む）のほかに貝片やカーボンが多数出土したが、その多くは細片であり、水洗選別によって検出されたものである。また、第20次調査では、縄文土器片5点、48点以上の動物骨（焼骨を含む）のほかに貝片やカーボンが出土している。

#### (1) 縄文土器 (第5図)

B-5区第3層から1点、D-5区第3層から5点、出土区不明のものが1点出土した。また、出土層位は不明であるが、B-4区から1点、B-5区から3点出土した。D-5区第3層で出土した縄文土器片5点のうち3点が接合し、ほかの2点についても胎土などから同一個体のものと考えられる。出土区不明の縄文土器片もこれらの土器片と類似しており、

同一個体の可能性がある。なお、接合したもの以外はいずれもわずかな小片のため図化できなかった。

第5図はD-5区第3層から出土した縄文土器の口縁部片である。内面にはナデ調整、外面には縄文が施されている。内面にはぶい黄橙色、外面は黒褐色を呈しており、胎土には微細な砂粒をわずかに含んでいる。帝釈峡遺跡群から出土している縄文土器にはあまりみられないものであるが、帝釈弘法滝洞窟遺跡や久代東山岩陰遺跡などでは縄文前期あるいは中期とされている土器のなかに類似資料がみられることから、ここでは縄文前期あるいは中期のものと考えておきたい。

### (2) 石器剥片類 (第6図)

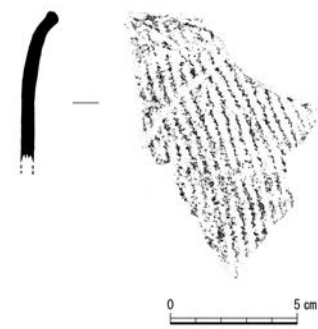
D-5区第3層から安山岩製石鏃が1点、E-5区第3～4層から安山岩製の石鏃片と考えられる剥片が1点出土したが、いずれも排土の水洗選別によって検出されたため出土状況は確認できていない。石器剥片類はいずれも安山岩であり、D-5区第3層から2点、D-6区第3層から1点出土している。また、各調査区からチップが出土している。

第6図はD-5区第3層から出土した安山岩製の凹基式石鏃である。最大長1.20cm、最大幅1.05cm、最大厚0.25cm、重量0.2gである。刃部の加工は周縁全体に及んでいるものの、表裏面ともに一部素材面が残っている。

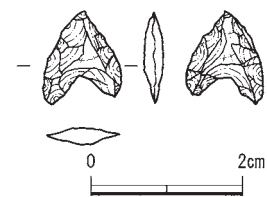
### (3) 自然遺物 (図版第5a)

第19・20次調査では各調査区から多数の動物骨、貝片、カーボンが出土した。動物骨はD-5区から65点以上、D-6区から109点以上、E-5区から19点以上出土しており、このうち、D-5区では11点、D-6区では27点、E-5区では5点の焼骨を確認した。動物の種類には、シカ・イノシシ・ウサギ・ネズミ・モグラ・カエル・ヘビなどが認められるものの<sup>(1)</sup>、哺乳動物の骨が大多数を占めている。なお、焼骨のなかで動物の種類がわかるものは、シカあるいはイノシシのものが多い傾向にある。その多くが排土の水洗選別によって検出された細片であるため出土状況は不明であるが、第3層から出土しているものがほとんどである。洞窟テラス東半の第3層において数基の焼土面が検出されていることを考えると、シカあるいはイノシシなどの中型・大型哺乳動物の骨については食料残滓の可能性が高いと考えられる。(平尾)

貝類は、D-5区から100点以上、D-6区から65点以上、E-5区から85点以上、その他の調査区から40点以上出土した。ほとんどはマイマイやキセルガイなどの陸棲貝類だが、淡水棲と思われる貝類片が水洗選別により少量確認された。D-5区3層から二枚貝の腹縁片1点が出土した。輪肋(成長脈)が粗く、カワシンジュガイ科あるいはイシガイ科かと思われるが、小片であり、表裏ともに劣化しているため判然としない。厚みや湾曲度合いなどが



第5図 帝釈大風呂洞窟遺跡出土土器 (1/3)



第6図 帝釈大風呂洞窟遺跡出土石器 (1/1)

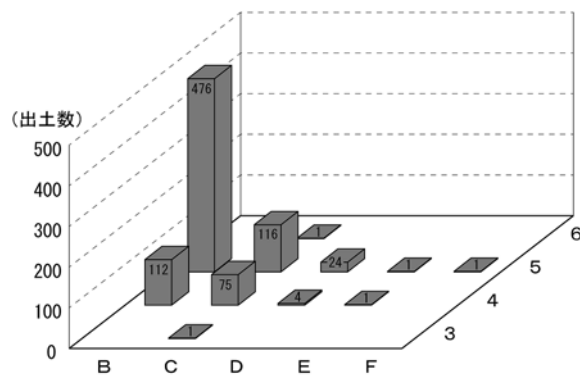
ら考えると殻長6～7cmほどに復元できそうである。同じくD-5区3層から腹縁あるいはその周辺の部位と考えられる二枚貝片が6点出土した。いずれも細片であり、詳細は不明であるが、厚みなどからすると同一種の可能性がある。その他、出土層位は不明であるが、D-4区からほぼ完形のカワニナ科（カワニナ?）1点が出土した。殻長約2.5cm、殻幅約1.3cmで、やや体層部が太く、螺塔部が小さいが、カワニナの地方変異の範囲内に収まると思われる。これらの淡水棲貝類片に被熱痕跡は確認できなかった。（市川）

## 6. 第3層における遺構、遺物の分布状況（第7～9図）

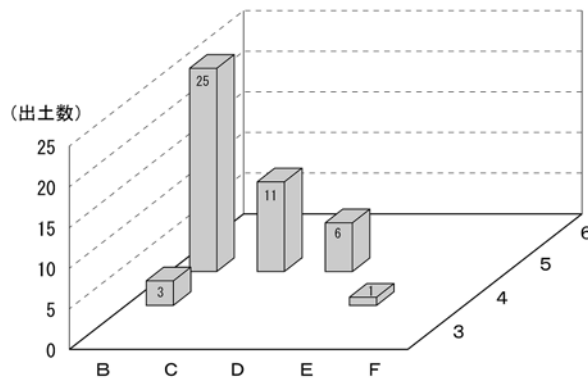
これまでの調査で遺構、遺物の分布状況が検討されており、洞窟の空間利用が明らかになってきた。第19・20次の調査で5区列における第3層の遺構、遺物の分布状況がほぼ明らかとなったため、これまでの報告に第19・20次の調査成果をつけ加える形で資料を提示し、第3層における遺構、遺物の分布状況について検討する。

過去の報告で、第3層における土器、石器類の分布はB-5区を中心とする洞窟テラス西半に集中していたのに対して、焼土面などの遺構はD-5区を中心とする洞窟テラス東半に分布していたことが指摘されている（竹広・迫田・藤田2009）。これは出土位置が判明している遺物のみでの検討であったが、排土から水洗選別によって検出された資料も加えた検討においても同様な傾向が指摘されている（竹広・市川・藤井・森本2014）。また、2012年度の第17次調査ではD-5区第3層より新たな焼土面が検出されるとともに、マシジミや石器剥片類などの遺物が集中して出土しており、D-5区周辺が炉を営むような生活の中心の場であったと推定された（竹広・松永2013）。

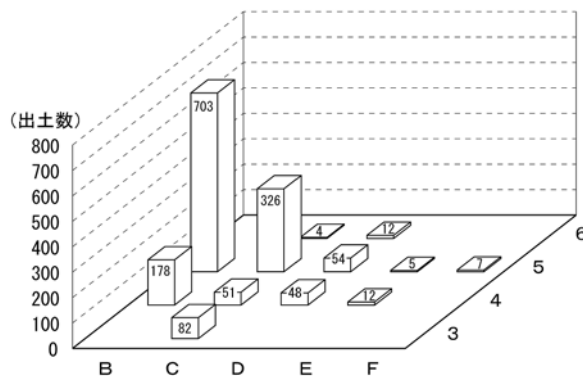
第19次調査では、D-6区第3層で新たな焼土面が1面検出され、D-5区第



第7図 帝釈大風呂洞窟遺跡第3層縄文土器出土分布状況



第8図 帝釈大風呂洞窟遺跡第3層石器出土分布状況



第9図 帝釈大風呂洞窟遺跡第3層剥片類出土分布状況



3層より縄文土器片5点、石鏃1点が出土した。第20次調査で遺構は検出されなかったが、E-5区第3～4層より石鏃と思われる剥片1点と、調査区外ではあるがB-5区北壁第3層相当の壁面より縄文土器片1点が出土した。そのほか、各調査区より数点の石材剥片、碎片が出土している。その分布状況をみると、土器・石器類ともにB-5区を中心とする洞窟テラス西半に分布が集中するという傾向に変化はない(第7～9図)。また、D-6区第3層で焼土面が検出されたことで生活痕跡が洞窟奥側にさらに広がることが明らかとなり、D-5区周辺が炉を営むなどの生活の中心の場であったと考えられる。(市川)

## 7. 調査の成果と遺跡の性格(第10図)

第18次調査と同様に、洞窟テラス東半でも洞奥寄りにあたる調査区の第3層以下における遺構や遺物分布を確認すること、埋葬遺構の有無などを確認することを目的とし、第19次調査ではD-5区、D-6区南半、E-5区の第3層以下の調査を、第20次調査ではD-5区、E-5区第3層以下の調査を行った。第19次調査の結果、D-6区第3層で焼土面が検出され、炉が洞窟奥側にも営まれていることが明らかとなった。また、洞窟テラス東半の第3層より下位の状況を確認するため、D-5区およびE-5区においてサブトレンチを設定し、第5層までの層序を確認した。なお、埋葬遺構については確認されなかった。以下、第19・20次の調査成果について、洞窟テラス東半の第3層以下の堆積層の状況と遺構・遺物の分布状況について整理し、最後に本遺跡の性格について考えてみたい。

### (1) 洞窟テラス東半の第3層以下の堆積層の状況について

第19・20次調査の結果、D・E-5区の北壁沿い、D-5区東壁沿い、D-5区礫集中部に設定した各サブトレンチにおいて第5層までの層序を確認することができた。これまで遺跡東半の5区列の第5層までの層序については、遺跡中央の縦断面であるC区東壁(D区西壁)ライン、部分的にD区東壁ラインとE区東壁ラインで確認されているのみであったが、第19・20次調査ではE区北壁ラインおよびD区東壁ラインにおいても確認できたことになる。F-5区では部分的な確認に留まっているが、第5層はF-5区からD-5区にかけて傾斜しながら堆積していることが明らかとなった。第4層は、遺跡東半4区列の調査において、D-4区では面的に確認されているが、E-4区では北壁や東壁で見られるものの面的には広がりを確認できていない(竹広・山手 2010、2011)。そして遺跡東半5区列の調査では、D-5区、E-5区においてC区東壁(D区西壁)ラインとほぼ同様な傾斜で洞奥に向けて第5層上面およびその上位の第3層・第4層が広がっていることが明らかとなった(竹広・市川・藤井・森本 2014)。第19・20次調査において、D-5区、E-5区において部分的に第5層の上に第3層が堆積している状況が認められ、E-4区の堆積状況と一致するものの、洞窟テラス東半全体でみると第3層以下の堆積状況は同様の傾向を示していると言ってよく、今回の調査によって第4層までの層序をほぼ把握することができたといえよう。

### (2) 遺構・遺物出土状況について

第19・20次調査により、D-5区、D-6区南半、E-5区の一部を除いて第3層を完掘

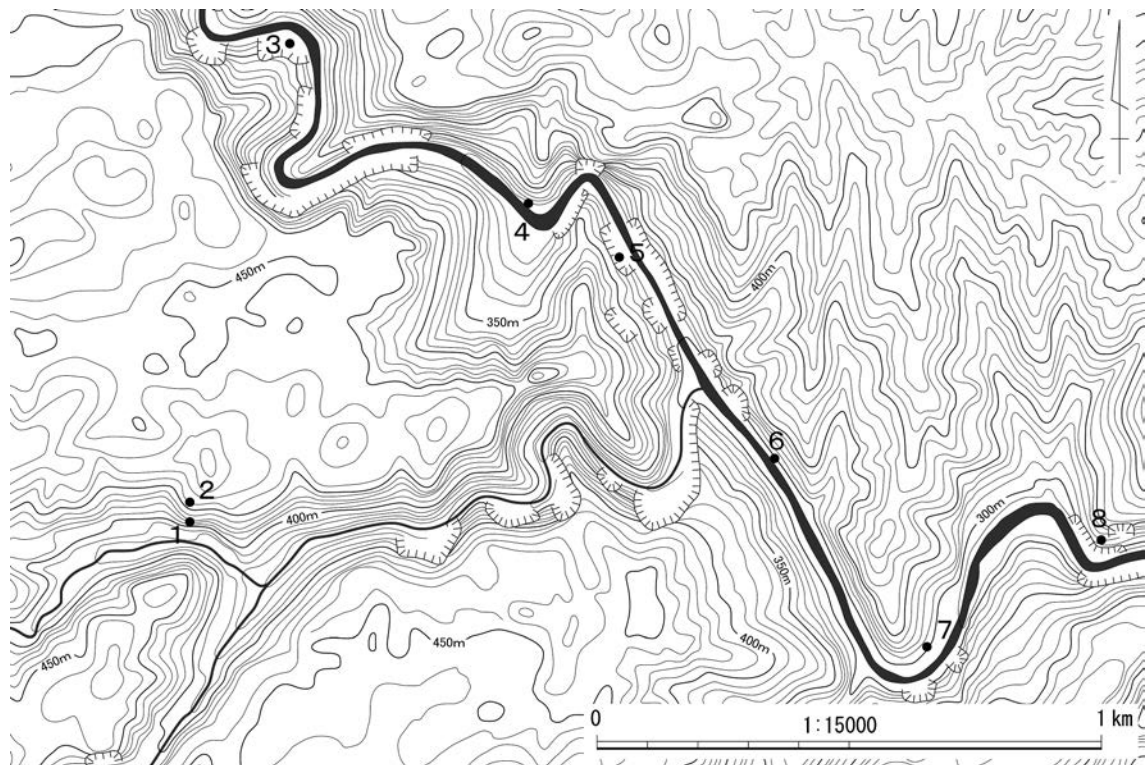
することができ、遺構・遺物の分布状況を確認することができた。この結果、D-6区第3層において焼土面1面が検出され、また、D-5区第3層からは縄文土器片、石鏃など出土した。これまでの調査の成果を踏まえ、洞窟テラス東半第3層の遺構・遺物の分布について考えてみたい。

洞窟テラスの調査では、遺跡西半に土器、石器剥片類の分布が多いことが注目され、その後の調査では遺跡東半に遺物分布が少ないという対照性が明らかにされてきた。第17次調査における遺跡東半5区列のD-5区第3層の調査では、焼土面周辺から一度の食事に伴うと考えられるマシジミ集中部、煮沸具と考えられる粗製土器破片、石器製作に伴うと考えられる石鏃や石鏃未成品を含む石器剥片類が確認された。そして遺構・遺物の分布状況から、洞窟テラス東半、特にD-5区周辺が生活活動の中心として利用され、洞窟テラス西半では土器や石器類などの遺棄や廃棄が主に行われていたという仮説が立てられた（竹広・松永 2013）。また第18次調査で、E-5区、F-5区に遺物分布の希薄域が広がることが明らかとなり、洞窟テラス東半でも活動の中心であったD-5区とは異なる別の性格の空間であった可能性が考えられた（竹広・市川・藤井・森本 2014）。昨年度の第19次調査の結果、D-6区第3層から新たに焼土面が1面検出され、炉が洞窟奥側に広がることが明らかとなったが、遺構・遺物の分布状況に変化はない。このことから、やはりこれまでに想定されたような空間利用が行われていた可能性が高いものと考えられよう。

### （3）帝釈大風呂洞窟遺跡の性格

最後に、第19・20次調査で出土した動物骨・貝類の様相と遺跡の立地の点から本遺跡の性格について考えてみたい。まず動物骨・貝類についてみると、動物の種類が同定あるいは推定できたもののうち、約半数がヘビ・ネズミ・モグラなどの小型種であり、これらには被熱痕跡はほとんど見られなかった。帝釈峡遺跡群においてヒトが上記の小型種を食していた痕跡は確認できていないという指摘（河村 1979、石丸 2007）の通り、現状では小型種を食していたとは考えにくい。被熱痕跡を確認できたものの多くがシカ・イノシシであるため、このような大型種を中心に食していたと考えられる。貝類はそのほとんどが陸棲貝類であり、淡水棲貝類は少ない。先行して調査が行われた遺跡西半の貝類出土状況も同様の傾向を示している（安間・中越 2001、八幡・加藤 2002、手島・滑田 2003、加藤・樋口・脇山 2004、加藤・上倉 2005、塩治・今井・須崎 2006）。本遺跡で出土した石器のうち石錘と報告されているものは2点のみであるため（安間・中山・幸泉 1997、安間・中尾・八幡・中越 2000）、淡水棲貝類の出土数の少なさと合わせて考えると、漁撈活動そのものがほとんど行われなかった可能性がある。ただし、溪谷では網漁以外にも行われていたと考えられ、少ないとはいえ一定数のカワナが出土していることから、遺跡の生業活動に関して検討の余地は残る。現段階では、遺跡の時期が断続的であることや、遺物の出土状況なども考慮に入れ、本遺跡が狩猟基地的な遺跡として機能していた可能性の指摘に留めておく。漁撈活動の有無も含めて、今後は本遺跡全体の動物遺存体の整理・分析が課題である。

次に遺跡の立地<sup>(2)</sup>について見てみると、大風呂洞窟遺跡周辺の遺跡が谷底に近い部分に



1. 帝釈観音堂洞窟遺跡 2. 帝釈大風呂洞窟遺跡 3. 帝釈花面岩陰遺跡 4. 帝釈次郎岩陰遺跡  
5. 帝釈次郎岩洞窟遺跡 6. 帝釈須床洞窟遺跡 7. 帝釈日比須岩陰遺跡 8. 帝釈弘法滝洞窟遺跡

第10図 帝釈大風呂洞窟遺跡周辺遺跡分布図 (1/15,000)

立地しているのに対して、本遺跡は永野の台地の辺縁部付近に位置していることがわかる(第10図)<sup>(3)</sup>。近接している観音堂洞窟遺跡と比較すると、両遺跡の比高差は約40mであるが、本遺跡と上方の台地との比高差は20m以下であり、傾斜も台地との間が緩くなっている。立地の点からみると、大風呂洞窟遺跡は台地と南側谷部の中継点のような位置付けにあった可能性が考えられる。事実、大風呂洞窟遺跡背面に位置する石灰岩岸壁が東側にのび、山麓斜面になる辺りから台地上に登れるようになっており、移動の動線上も無理がない<sup>(4)</sup>。さらに、今回地図上では示していないが、本遺跡から北北西約2km離れた台地上に開地遺跡である帝釈金山遺跡が存在する。その間は現在空白地帯であるが、開地の遺跡が存在していた可能性は十分にある。現状では未解明のことも多いが、本遺跡は観音堂洞窟遺跡と台地上の開地遺跡とを結ぶような役割を持っていたのではないだろうか。少なくとも、周辺の遺跡との立地は大きく異なっており、その性格が異なっていたと推測される。ちなみに観音堂洞窟遺跡が中核的な性格をもち、渓谷沿いにおける生活活動を担っていたことも想定できる。帝釈遺跡群全体の様相を解明するためにも、開地遺跡の有無も含めた台地上の調査が必要となるだろう。

(市川)



## 註

- (1) 動物骨については広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門研究員の石丸恵利子氏に種の同定をしていただいた。記して感謝したい。
- (2) 立地に関する言及は、調査中の討議の中で話題としてあがり、本遺跡への動線は下方の観音堂洞窟遺跡と結ぶものよりは上方の台地と結ぶ方がより適切ではないかを話し合った。地図上での検討や実際に台地上に登り降りすることで理解したことを考察したものである。
- (3) 今回は、縄文時代を含む遺跡のみ示している。
- (4) 実際に移動してみた印象として、整備された道がなかった分は苦労したが、地形図の通り観音堂洞窟遺跡－大風呂洞窟遺跡間よりは移動距離が近く、傾斜も緩いため、比較的容易に台地上に登ることができた。

## 引用・参考文献

- 安間拓巳・中山一夫・幸泉満夫 1997 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第1次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XII、11～17頁。
- 安間拓巳・中尾篤志・八幡浩二・中越利夫 2000 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第3・4次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XIV、13～34頁。
- 安間拓巳・中越利夫 2001 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第5次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XV、13～26頁。
- 石丸恵利子 2007 「山間地域における縄文時代の狩猟と遺跡の利用形態－帝釈遺跡群の洞窟・岩陰遺跡の検討－」『動物考古学』第24号、1～23頁。
- 塩治琢磨・今井千佳子・須崎瀬里奈 2006 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第10次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XX、9～19頁。
- 加藤 徹・樋口英行・脇山佳奈 2004 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第8次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XVIII、9～22頁。
- 加藤 徹・上倉郁子 2005 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第9次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XIX、9～21頁。
- 河村善也 1979 「帝釈観音堂洞窟遺跡土器伴出層準出土の小型哺乳動物遺体 第2報」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』II、45～55頁。
- 吉良哲明 1954 『原色日本貝類図鑑』保育社。
- 竹広文明・迫田苑子・藤田 親 2009 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第13次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』XXIII・広島大学考古学研究室紀要第1号、9～21頁。
- 竹広文明・山手貴生 2010 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第14次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』XXIV・広島大学考古学研究室紀要第2号、9～22、41～45頁。
- 竹広文明・山手貴生 2011 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第15次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』XXV・広島大学考古学研究室紀要第3号、9～22、39～43頁。
- 竹広文明・小川原励 2012 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第16次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』XXVI・広島大学考古学研究室紀要第4号、9～20、39～41頁。
- 竹広文明・松永直輝 2013 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第17次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』XXVII・広島大学考古学研究室紀要第5号、9～26、49～54頁。
- 竹広文明・市川伯博・藤井翔平・森本直人 2014 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第18次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』XXVIII・広島大学考古学研究室紀要第6号、9～26頁。
- 手島智幸・滑田健二 2003 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第7次）の調査」『広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室年報』XVII、15～24頁。

- 増田 修・内山りゅう 2004 『日本産淡水貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類』ピーシーズ生態写真図鑑シリーズ2、株式会社ピーシーズ。
- 八幡浩二・加藤 徹 2002 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第6次）の調査」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XVI、13～19頁。

## Excavation at Taishaku-Ōburo Cave Site (19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> excavation)

Hakuhiro ICHIKAWA, Hideki HIRAO

Taishaku-Ōburo cave site is located in Nagano, Jinseki-kōgen-chō, Jinseki-gun, Hiroshima Prefecture, on the upper side of the Taishaku-Kannondō cave site. The small sized cave is 11 m wide, 4 m deep, 3-3.5 m high. The surface of its terrace is approximately 40 m<sup>2</sup>. The cave was discovered in 1984 and for the last 21 years 20 excavation campaigns were carried out. According to the results obtained in these excavations, artefacts dating from the Nara period to the Muromachi period were found within the 1<sup>st</sup> or the 2<sup>nd</sup> layer, pottery and common orient clams (*hamaguri*, *Meretrix lusoria*) dating from the Late Jōmon period were found within the 3<sup>rd</sup> layer, artefacts dating from the Incipient Jomon period to the Initial Jōmon period were found within the upper part of the 5<sup>th</sup> layer. Some bones from animals extinct since the Pleistocene were found within the 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> layer.

Remains of scorched soil etc. were found in the stratigraphy in the back of the cave in the 2<sup>nd</sup> and the 3<sup>rd</sup> layers. Especially, in the D-5 section in the Late Jōmon period many remains of fireplaces were found. One assumes that their vicinity was used as living space. Pottery and stone tools were abandoned in the west part of the cave. Bones of small animals like snakes, mices, moles etc. didn't show traces of heating. Therefore, it is conceivable that large animals like deer, wild boar etc. were eaten.



帝釈大風呂洞窟遺跡

図版第 1



a. 調査区全景（調査終了時・西から）

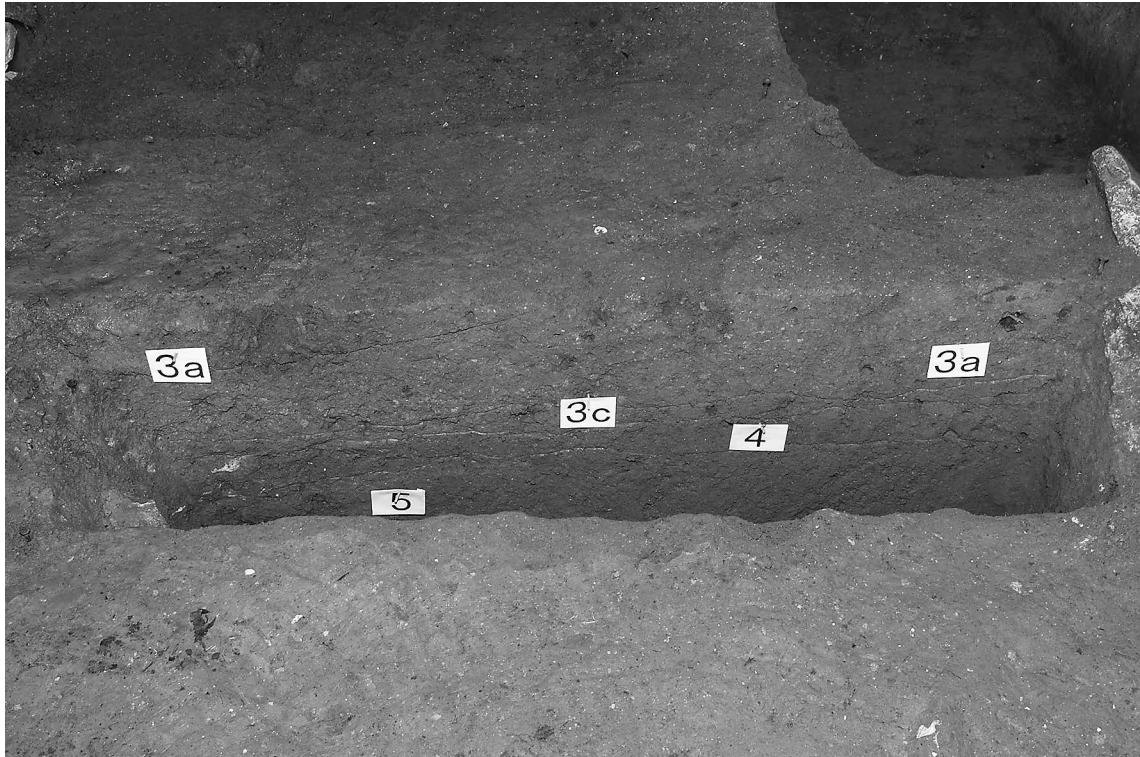


b. 調査区全景（調査終了時・東から）



帝釈大風呂洞窟遺跡

図版第 2



a. D-5区北壁土層堆積状況（調査終了時・南から）

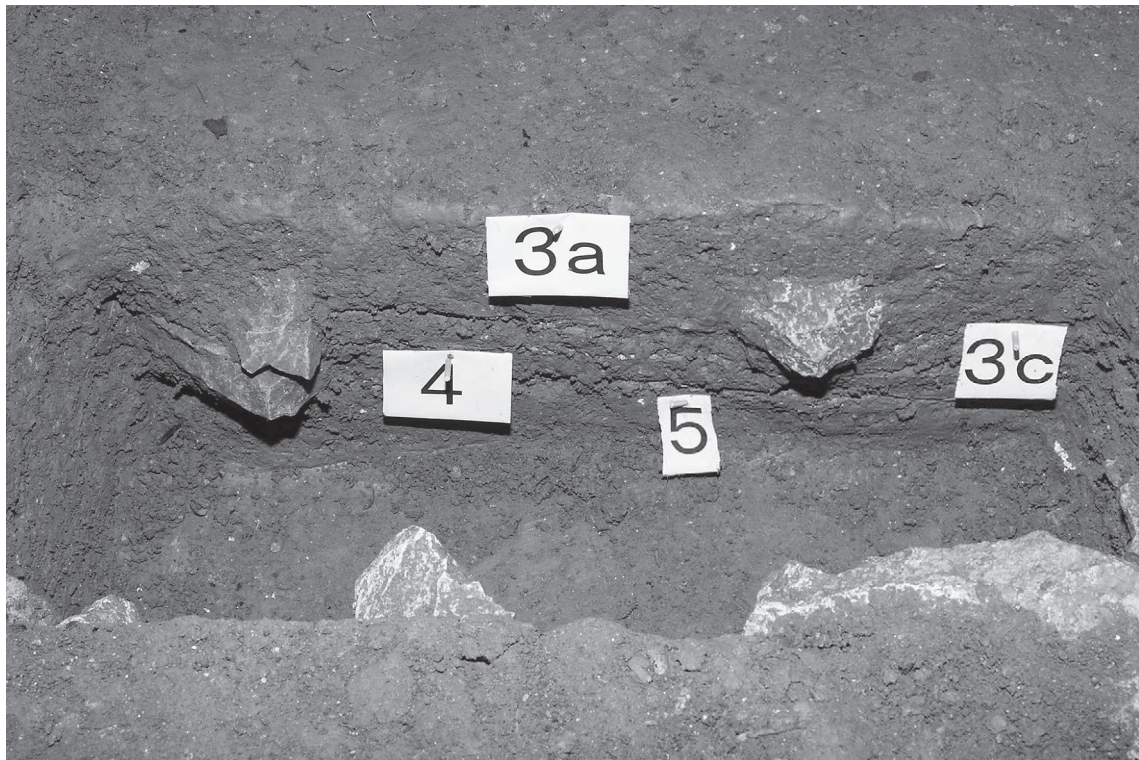


b. D-5区東壁土層堆積状況（調査終了時・西から）

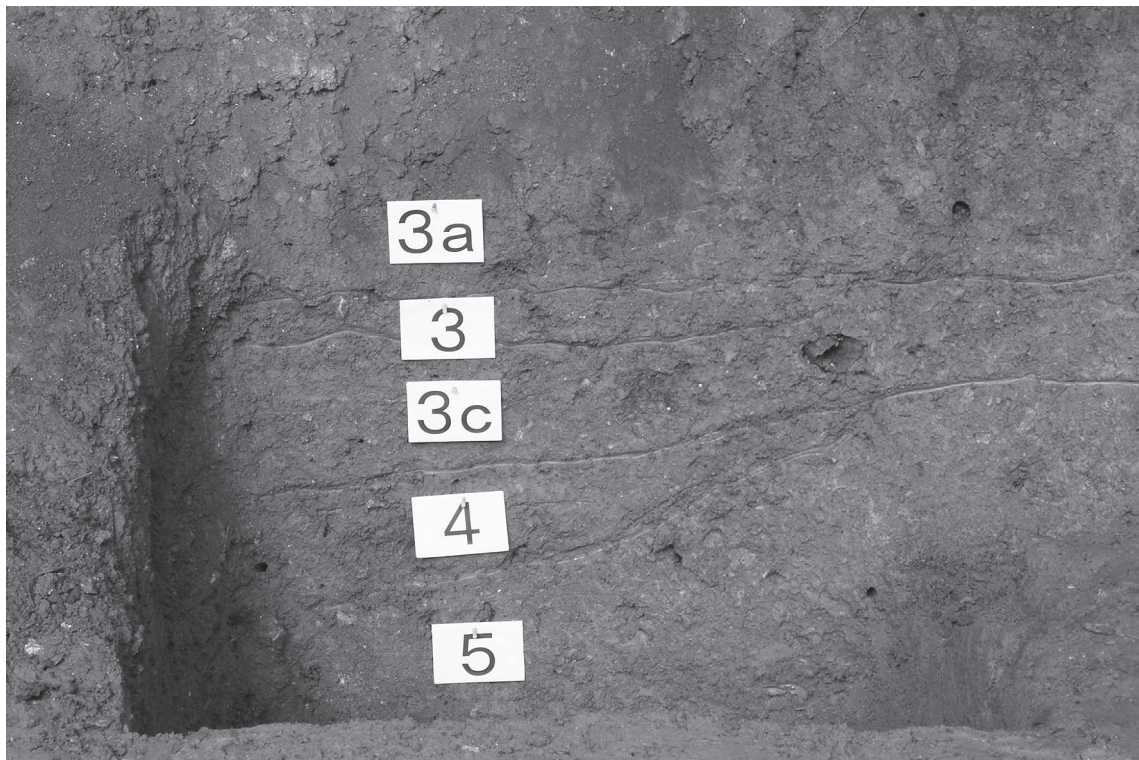


帝釈大風呂洞窟遺跡

図版第 3



a. D-5区南壁沿いサブトレンチ西壁土層堆積状況（調査終了時・東から）



b. E-5区北壁土層堆積状況（調査終了時・南から）



帝釈大風呂洞窟遺跡

図版第 4



a. D-6区焼土面SX-14-1 (南から)



b. 2014年度 (第19次調査) 出土土器・石器

帝釈大風呂洞窟遺跡

図版第5



a. 2014・2015年度（第19・20次調査）出土動物骨・貝類



b. 調査区全景（埋め戻し終了時・東から）